

特集

匠の技の結晶

豊橋筆



文字の美しさだけでなく、書く人の心までも表現できる筆。最近では筆を使うことも少なくなり、書道は子ども頃から来していないという方も多いのではないのでしょうか。実は、豊橋は全国でも有数の筆の生産地。高級筆では全国7割のシェアを誇り、「豊橋筆」の名で多くの書道家に愛されています。

今回の特集では、豊橋筆の歴史や技術、それを受け継ぐ職人たちの想いなどを紹介します。きつと、あなたも筆を手にとってみてください。

問合せ 商工業振興課

(☎51・2425)

歴史ある筆物語 京都の匠から伝わった技術

豊橋筆の起源は、江戸時代後期の文化元年（1804年）にさかのぼります。京都の筆師・鈴木甚左衛門が、吉田藩（豊橋）学問所のために筆を作る御用筆匠として迎えられ、毛筆を製造したのが始まりといわれています。幕末になると、吉田藩の財政が苦しくなり、節約と減俸に悩んだ藩士たちが人目に触れずにできる内職として、この地域で手に入りやすかったタヌキやイタチなどの獣毛を使って筆作りに励むようになりました。こうして、筆作りが下級武士の副業として広まっていきます。

豊橋筆の功労者 芳賀次郎吉と佐野重作

明治に入り教育が普及すると、毛筆の需要が高まります。筆作りを専業として始めた芳賀次郎吉が、従来の芯巻筆（穂の根元に紙を巻き、獣毛を植える筆）から現在の水筆（芯を入れず、獣毛を糊で固めた筆）へ改良し、さらに、その弟子の佐野重作が研究を重ねました。やがて、重作は独立して多くの弟子を養成し、技術を向上させただけでなく、東京方面へと販路を拓き、豊橋筆隆盛の基礎を築いていきます。

豊橋から東京、そして全国へ

豊橋が東海道五十三次の宿場「吉田宿」として栄えていた頃、重作は販路の開拓を積極的に行いました。すると、安価で品質の良い豊橋筆が認められ、多くの注文が入るようになります。豊橋筆は有名になっていきました。そして、全国の書道家や画家に広く愛用され、需要が高まり、明治後期には約1200人にまで筆職人が増えるほど、筆作りは大いに栄えました。

伝統工芸品として発展 守り続ける技法

昭和51年には脈々と受け継いだ歴史と品質が高く評価され、伝統的工芸品として指定を受けました。現在、全国2位の生産本数を誇り、特に高級品の分野では生産数量・金額ともに7割を豊橋が占めるほどです。今日も、豊橋筆の伝統工芸士（※）として認定された12人を始めとする職人たちがその技法を守り続けています。

（※）伝統工芸の技術や技法を保持する人を認定する国家資格。12年以上の実務経験がある上で、知識・技術・面接試験に合格した者が認定される。



学校の書道で使う筆から、身長ほどの大きさの筆までサイズはさまざま



重作が製作したとされる筆。竹に漆が塗られた持ち手になっている



ヤギやウマ、イタチのほか、クジャクの羽なども穂に使われる

豊橋筆ができるまで



悪い毛を取り除く「さらい」は全工程を通じて何度も行う。その素早い手さばきにはカメラが追いつけないほど

一、毛もみ

筆専用のアイロンをあてて、くせを取った毛に、^{もみ}糲殻を焼いて作った灰をまぶし、鹿皮を巻いて両手で強く揉み上げる。この作業で毛の脂を取り除き、墨の含みを良くする。

二、練り混ぜ

種類や長さの違う毛を組み合わせ、広げては折りたたむ作業を何度も繰り返しながら、むらがないように混ぜ合わせる。豊橋筆独特の工程で、高い品質を保つ秘訣の一つ。



穂先を円錐形にするため、何通りもの長さの毛を用意する

こだわりの手仕事

一、伝統工芸を支える道具

はさみ、金櫛など、シンプルな道具をいくつも使い分ける。穂先の寸法を決める「分板」は、一本の穂に約20種が使われる。



一、原毛の特徴を理解する

山羊毛は墨含みが良い、馬毛は光沢・粘りがあるなど、それぞれの原毛の特徴を理解し、使いこなすことで、最高の書き味を生み出すことができる。



一、時を経ても同じ書き味

書き手の要望に応じて作る豊橋筆。職人それぞれの想いは込められても個性は抑え、常に同じ形・質感を保つ努力を欠かさない。そのために、自ら書き味を試すこともある。



豊橋筆（太筆）ができるまでにかかる日数は、約10日。製作工程は全部で36工程あり、一人の職人が全工程を責任を持って担当します。ここでは、大きく4つに分けて製作工程を紹介します。



左が上毛を巻く前、右が巻いた後の穂。わずか1mm程度の上毛を均一に巻く繊細な作業に職人技が光る

三、上毛がけ

上毛と呼ばれる「化粧毛」を金櫛ですき上げ、薄く引き延ばして芯に巻き付ける。化粧毛には白色や茶色の山羊毛や馬の胴毛を主に使い、見栄えを良くする。

四、尾締め

穂の根元に麻糸を食い込ませ、尻の部分をコテで焼き、歯で糸を噛みながらグッと締めて毛を一つにまとめる。毛を焼く匂いと煙が部屋中に立ちこめる。



麻糸でつながった穂。櫛を通すと穂先がふんわりと広がる

職人の使命 真摯に向き合うことが

豊橋筆がこの地で栄えたのは、豊橋の人が「勤勉で我慢強い」という職人氣質だったことも理由の一つだと思います。職人たちの受け継いだ仕事の質の良さが、品質の良さへとつながっているからこそ、豊橋筆が高級筆といわれているのです。

戦時中の徴兵や空襲被害で衰退し、今では豊橋で筆が作られていることすら知らない方もいます。知名度を上げていくことはもちろんですが、私たち職人は若手に受け継ぎながら技術を磨き続け、経験を積み、素材を見極める目を保つことが大事です。昔ほど質の良い原料が入ってこない分、研究を重ね、職人の気分で変わらなような品質を保つ努力が欠かせません。

豊橋筆を買いに来た方には、「どんな書を書きたいのか」「どんな目的・想いがあったか」「書くのか」などを聞いてから、要望に合う筆を勧めるようにしています。書き手に、そして筆作りに真摯に向き合うことが伝統工芸士としての使命だと考えています。



豊橋筆振興協同組合 伝統工芸士 杉浦 美充さん



—なぜ、職人の道を選んだのか

浜千代 中学校卒業と同時にこの道に飛び込みました。幼い頃からものづくりが好きだったこともあり、小学校の教科書で見た豊橋筆は特に心に残っています。中学生の時の職場体験で、なんとなくやりたい気持ちから強い決意に変わり、1年でも早く技術を習得しようと、この世界に進みました。

中西 私も小さい頃から図工や日曜大工が好きで、何か技術を身に着きたいという気持ちが強くなりました。大学時代、京都で伝統工芸の勉強をした後、地元に戻って職人になりたいと思い、21歳の時辿り着いたのが豊橋筆です。しかし、何軒も回っても弟子入りは難しく断られ続ける毎日。職人の世界は女性や、若手を受け入れる体制作りに課題があると聞いていましたが、直に痛感しました。今の師匠に出会えて感謝しています。

—筆作りの魅力とは

中西 使い手が求めるものを作れる



る豊橋筆は、私の性分に合っています。細かな意見にも応じやすいですし、一人で全工程を行うので責任感とやりがいがあります。

浜千代 筆職人は「自信があるから買ってほしい」ではありません。

使い手がいて、書き手が求めてくれるからこそ、想いを込めて形に表現するものです。それこそが、「書き味がいい」と広まった豊橋筆が、今まで高級筆として認められてきた理由だと思います。そして、地元で伝統的な技法が受け継がれていることを誇りに思います。

—やりがい、辛いことは

浜千代 「また同じものを」と再度頼まれると、気持ちを込めて作ったか

中西 それは思います。ある書家に「面と線がいい筆だ」と評価され、嬉しかったことを覚えています。書き手の生の声は滅多に聞けないので、筆作りの参考になります。

浜千代 僕ははまだ師匠に教えることがありませんし、見本を見ながら作ります。紙につけた時の

若手職人に聞く



浜千代 栄作さん (27歳)
豊橋生まれ・豊橋育ち。
職人歴13年目。



中西 由季さん (28歳)
豊橋生まれ・豊橋育ち。
職人歴9年目。

筆職人には40~80歳のベテランが多い中、伝統工芸の新たな担い手として20歳代の職人が2人います。なぜ、豊橋筆職人という生き方を選んだのか、その魅力などを伺いました。



感覚や、毛先の太さ、使う動物の毛によって変わる筆の違いを見分ける目を養っていきたくですね。辛いことは、あぐらをかくことですね。
中西 私も！一日中あぐらなので、初めは腰を痛めました。

—お互いの印象は

中西 浜千代さんは、同年代の職人として心強い存在ですね。私たちがの上は40代なので、同年代がいると情報交換もしやすいです。中学校卒業後すぐに職人になる人は珍しいですよ。

浜千代 当時は後継者のことまで考えませんでした。今思えば貴重かもしれないですね。女性の職人が少ない中、中西さんも貴重です。今後は女性の感覚を筆作りに取り入れてほしいと思います。筆職人は、「あの人よりうまく作ろう」といった競争相手ではありません。筆の評価は書き手によるもの。お互いが技を磨き、切磋琢磨できる存在になればいいと思います。

—豊橋筆のこれからについて

浜千代 豊橋筆に限らず、まず筆が身近なものになったら良いですね。



書道という堅苦しく思われがちですが、もっと気軽に筆を使ってみてほしいです。気持ちを表しやすいのが筆のいいところ。豊橋筆は高級筆というイメージがありますが、すべてが高級筆ではありません。手頃な価格で使い勝手が良いものもあります。

中西 筆は曲線・直線などの強弱・動きが付けられるので、私も手紙の宛名は筆で書くようにしています。

浜千代 綺麗に上手く書こうとせず、筆に親しみ、筆ならではの毛の動きを楽しんでほしいです。

中西 そのためにも、子どもたちには出前授業などで豊橋筆の魅力を伝えていきたいですし、実際に筆を使ってもらって体験の場を増やしたいです。また、時代に合わせた発信方法や、後継者が入って来やすい環境・イメージ作りも欠かせません。ものづくりの楽しさを知ってもらい、女性にも来てもらえたら嬉しいですね。



鈴木 愛さん (デザイン書道作家)
豊橋市出身。商業的ロゴの創作を始め、イベントでのパフォーマンスなどを行う

私が使う筆は全て豊橋筆です。工房を回り、職人さんに特注で作ってもらうこともあります。豊橋筆の魅力は何より質の良さ。筆の穂先まで私の想いが届き、魂が通っていると実感できます。技術・表現力を筆が捉えて動いてくれます。文字は一見、形でしかありませんが、想いを込めることができるものです。その文字に余計な線が出ないのも豊橋筆の特徴です。職人さんが丹精込めて、一本一本

イメージや想いを文字で表現するデザイン書道。デザイン書道を豊橋筆で書き続けるデザイン書道作家の鈴木愛さんに、豊橋筆の良さなどを伺いました。



使う筆は大きささまざま。約130本の筆を使い分け表現を変えている

丁寧に作っているからだと思えます。また、豊橋筆で書くかすれには潤いがあり、生き生きとして、文字から美味しさや、命すら感じられるんです。豊橋に住んでいるからこそ、この質の良さを感じることができましたし、そんな豊橋筆を手にできることはとても恵まれています。身近に素晴らしい筆がある土地だ

からこそ、ぜひ筆を手にとってみてほしいと思います。「文字はこうでないダメ」という固定概念を外して、自由に楽しく、気楽に、そして心を解放して文字を書いてみてください。筆の力を借りて豊橋筆の良さを楽しむこと。それだけで、筆の素晴らしさを感じられると思います。



デザイン書道作品例



豊橋筆に触れてみよう

出前授業

豊橋筆振興協同組合では、子どもたちが筆の試し書きや製作工程の一部を体験できる出前授業を開催しています。豊橋筆作りの体験を通し、その魅力を伝え続ける活動を続けています。

作った筆で文字を書いてみたいなあ。



主な豊橋筆販売店

(有)村井文魁堂 (☎ 52・3543)、
(有)高誠堂 (☎ 52・5514)、
(有)筆匠榊原 (☎ 62・0034)
ほか



見学できる製造所

(株)杉浦製筆所 (☎ 61・8155)、(有)榊原毛筆 (☎ 61・7642)、豊橋筆高山工房 (☎ 88・2504)



一度、のぞいてみてください。